

飾品はSD02以北に集中し、職能民の生業に関係すると考えられる工具・漁具・工業廃棄物はSD02以南に集中する傾向が見られるのではないかと予測したが、格の高い遺物に関しては空間の分布に大きな差異はみられず、工具に関しては予想された結果とは逆にSD02以北に集中する傾向が見られた。工具がSD02以北に集中した原因に関しては今回作成した分布図が時期ごとではないことを考慮すると、SD02廃絶後に竪穴建物が多く作られるようになる時期の遺物を多く含むためと考えられる。

(c) 遺物の接合状況（第27～32図）

第86・87次調査区において出土した中世の土器・陶磁器類総数3946点のうち、接合を確認できた資料は240例であった。遺物ごとの傾向を読み取るために遺物の種類ごとに図版の作成を行ったが、各遺物の種類ごとで異なる傾向はみられなかった。これらの接合資料は調査区内に広く分布しており、同一遺構内での接合にとどまるものから、40m以上はなれたところにある別の遺構のものと接合したものまで存在する。同一遺構内での接合にとどまる資料が少ないため、遺物は二次的に移動していると考えられ、本来それが使用されていた地点で出土したと認識することは難しい。しかしSD02によって区画された、北側の領主館と推定される範囲と南側の家臣団屋敷と推定される範囲の遺物が接合した資料は少なく、それらの資料もSD02廃絶後の時期にあたることから、SD02が利用されていた時期には堀の北側と南側で陶磁器使用の場が明確に分けられていたと考えられる。

今回の調査区では出土遺物の分布状況から遺跡内の格差にもとづく空間の違いはみられなかつたが、接合状況から、堀を境界とする陶磁器使用の場の違いがあつたことがわかつた。また遺物の移動状況に関しては江馬氏館や一乗谷朝倉氏遺跡といった城館跡によく見られるような現象(小野1991、中田1997)を十三湊遺跡の領主館周辺である今回の第86・87次調査区においても示唆できるであらう。(渡辺 樹)

(d) 小 結

GISに関しては、今回は膨大な数の出土遺物を整理し、遺跡全体の中での遺構とのかかわりを考えるため、実験的に利用した。その成果として、分布図作成に格段の効率化を図れたこと、堀を境界として陶磁器使用の場が明確に分かれることを示すことができた。これらの成果から、地形と遺構とのかかわりの中でしか論じざるを得なかつた、地理学寄りの分析手法から出土遺物と遺構という、より考古学的な視点からの分析を可能とするに至つたといえよう。汎用的な利用には解決すべき問題が残るが、今後も考古学に積極的に応用し、利用の幅を広げて行きたいと考えている。

(戸簾暢宏)

(註)出土遺物の属性分類は、宇野隆夫氏による食器の使用法の復原(宇野1997b)を参考に戸簾と渡辺が行つた。

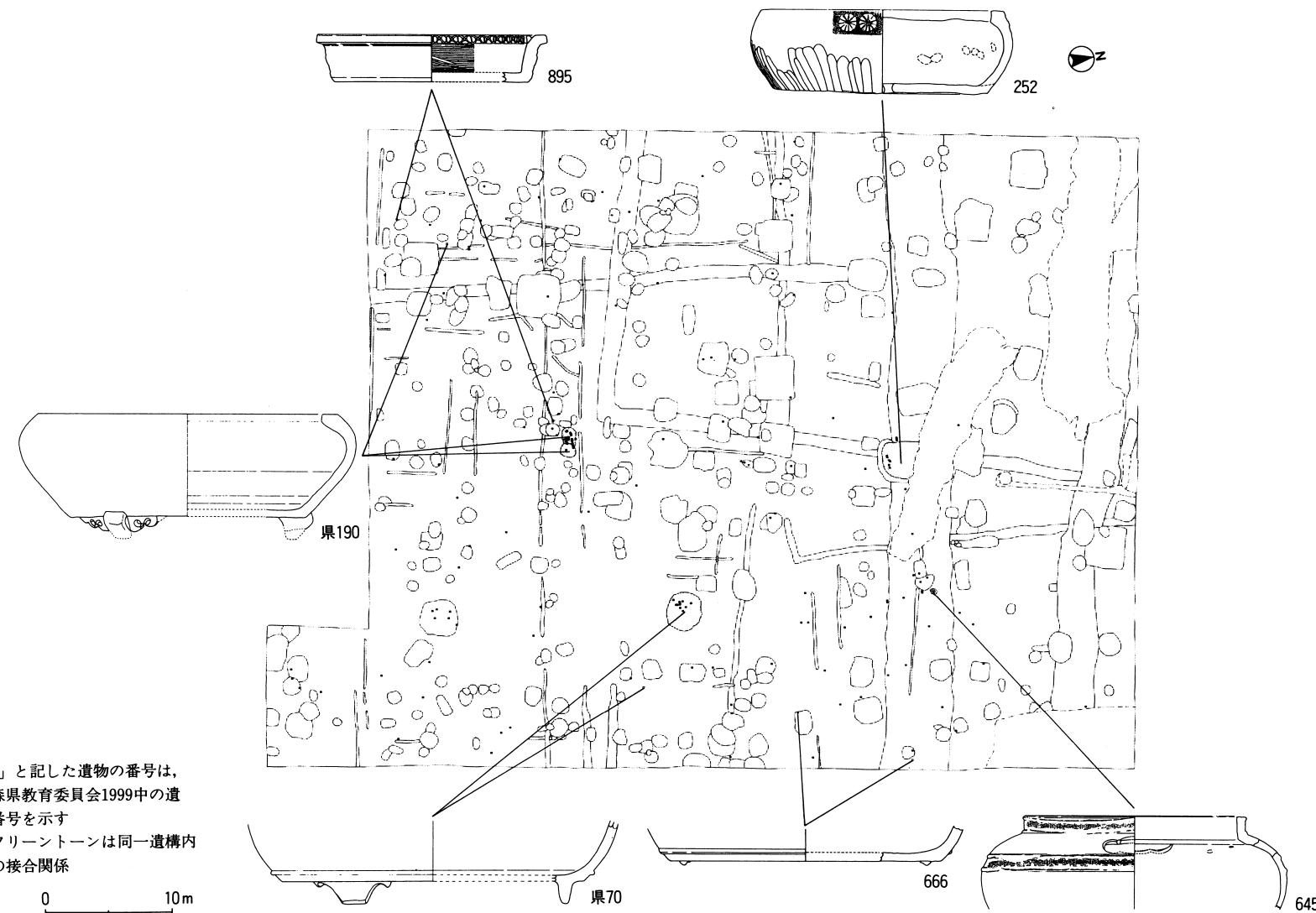
(付記)本稿の作成にあたり、富山大学人文学部講師内山純蔵氏にご指導を頂いたことを記して謝意を表したい。

(3) 錢 貨

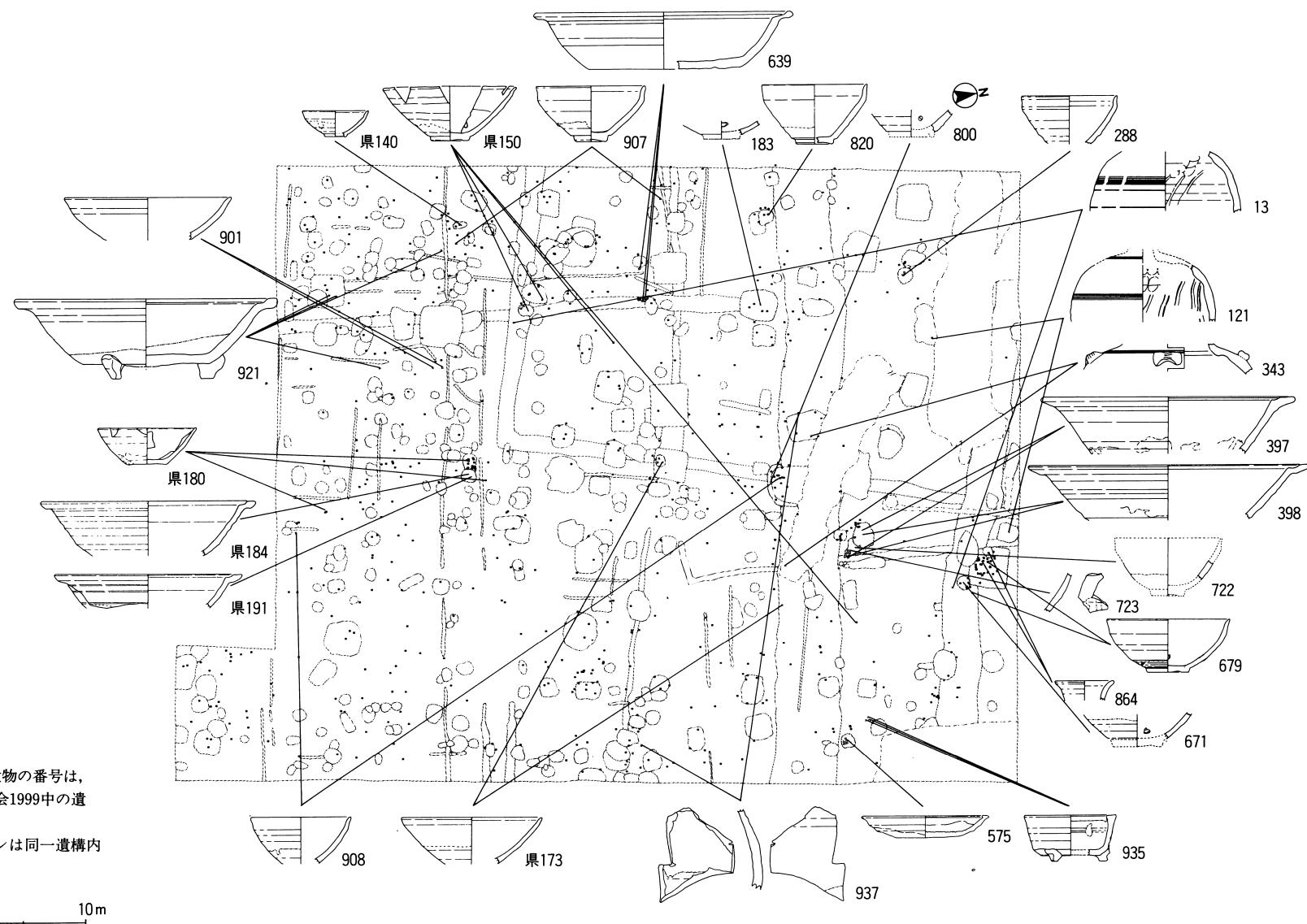
(a) はじめに

出土銭貨は一括出土銭の時期比定が行われ(鈴木1999、永井編1994・1996)、六道銭から経済的側面、あるいは銭貨自体の意味や一括出土銭の性格についても活発な研究が行われている(網野1994、橋口1993・1997・1999)。

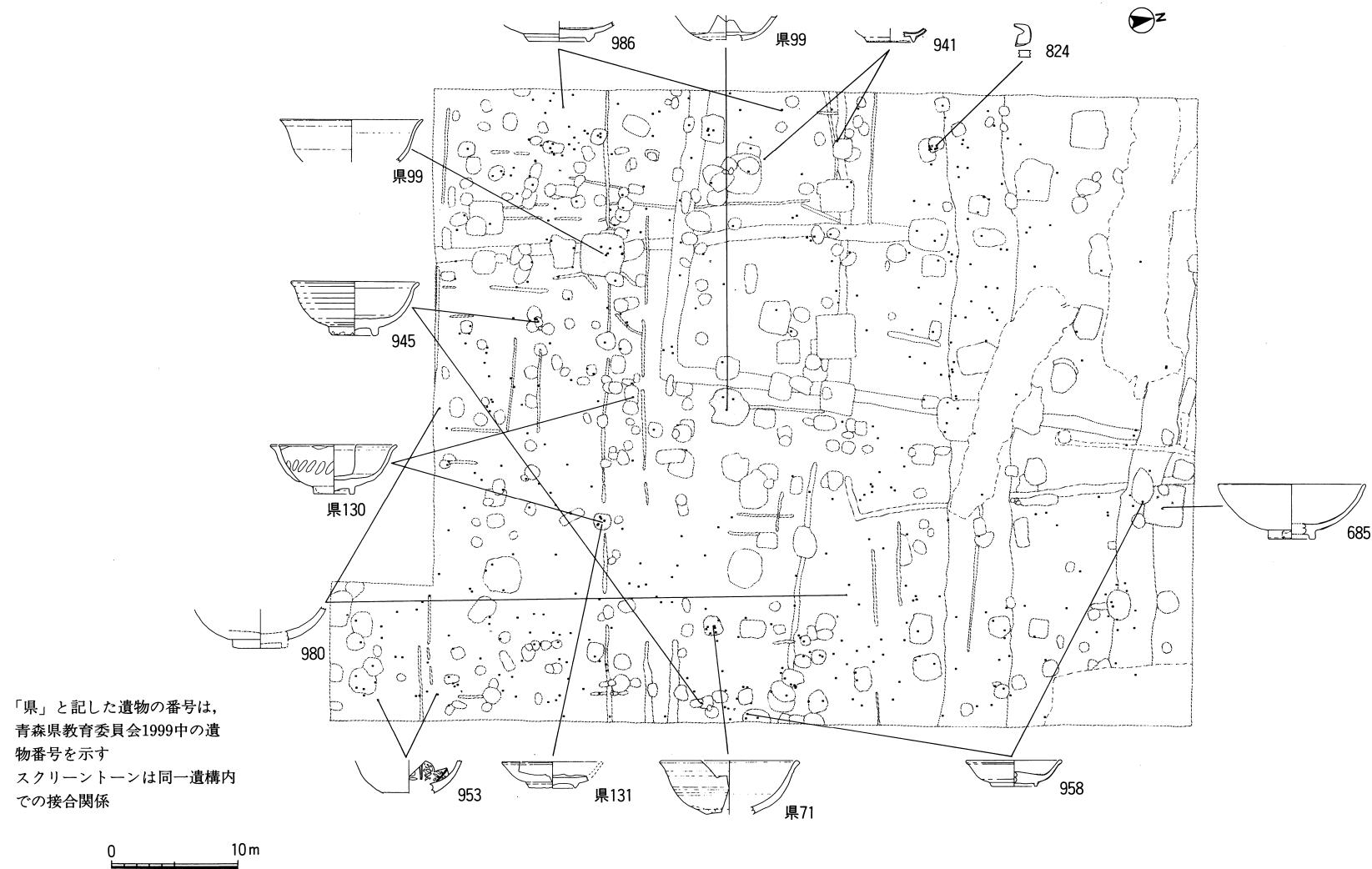
だが出土銭貨の中には、調査区内から散発的に出土し、一般的には良好な資料とは言いがたいものが



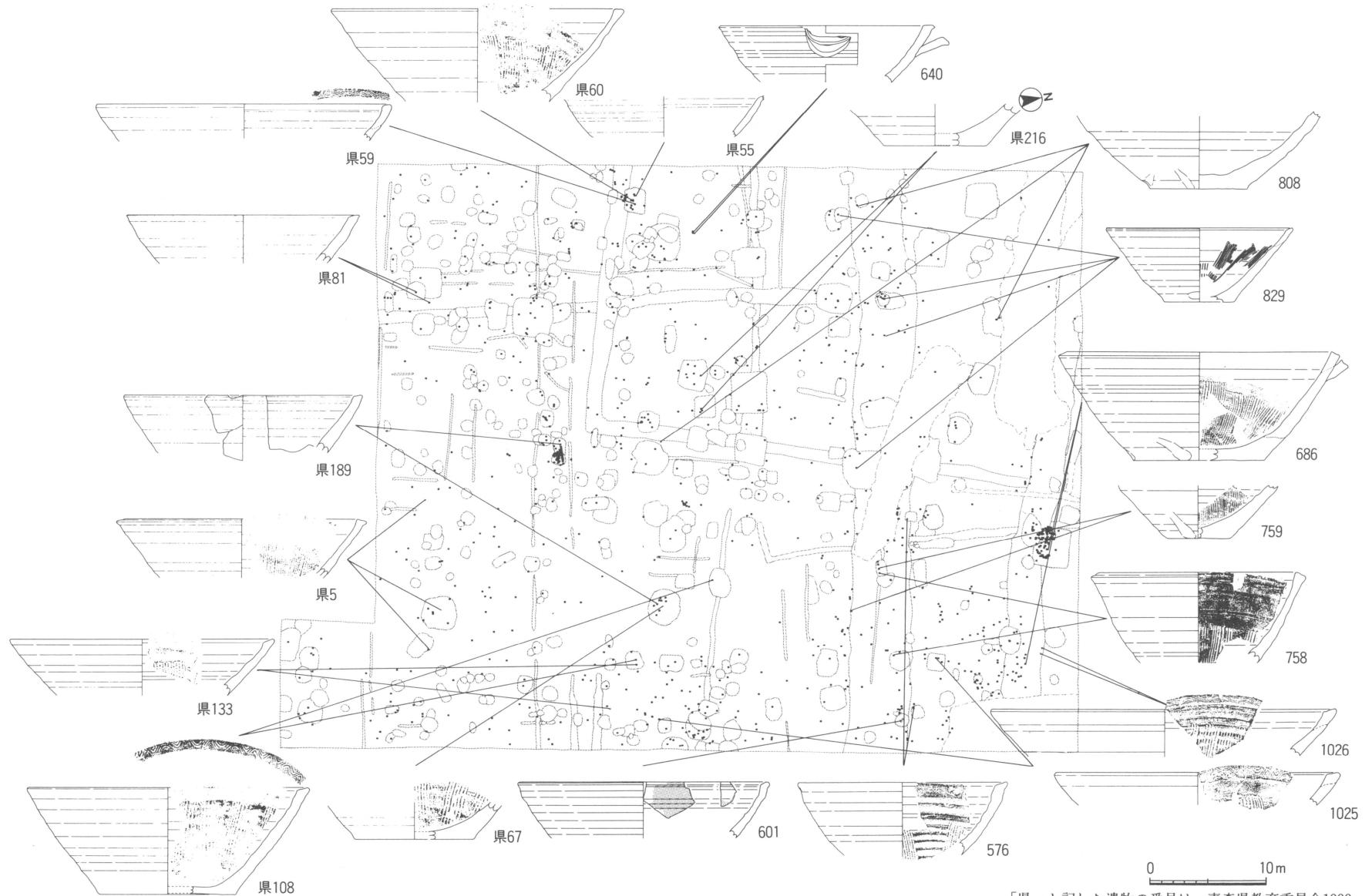
第27図 瓦器接合関係図



第28図 濑戸美濃接合関係図



第29図 貿易陶磁接合関係図



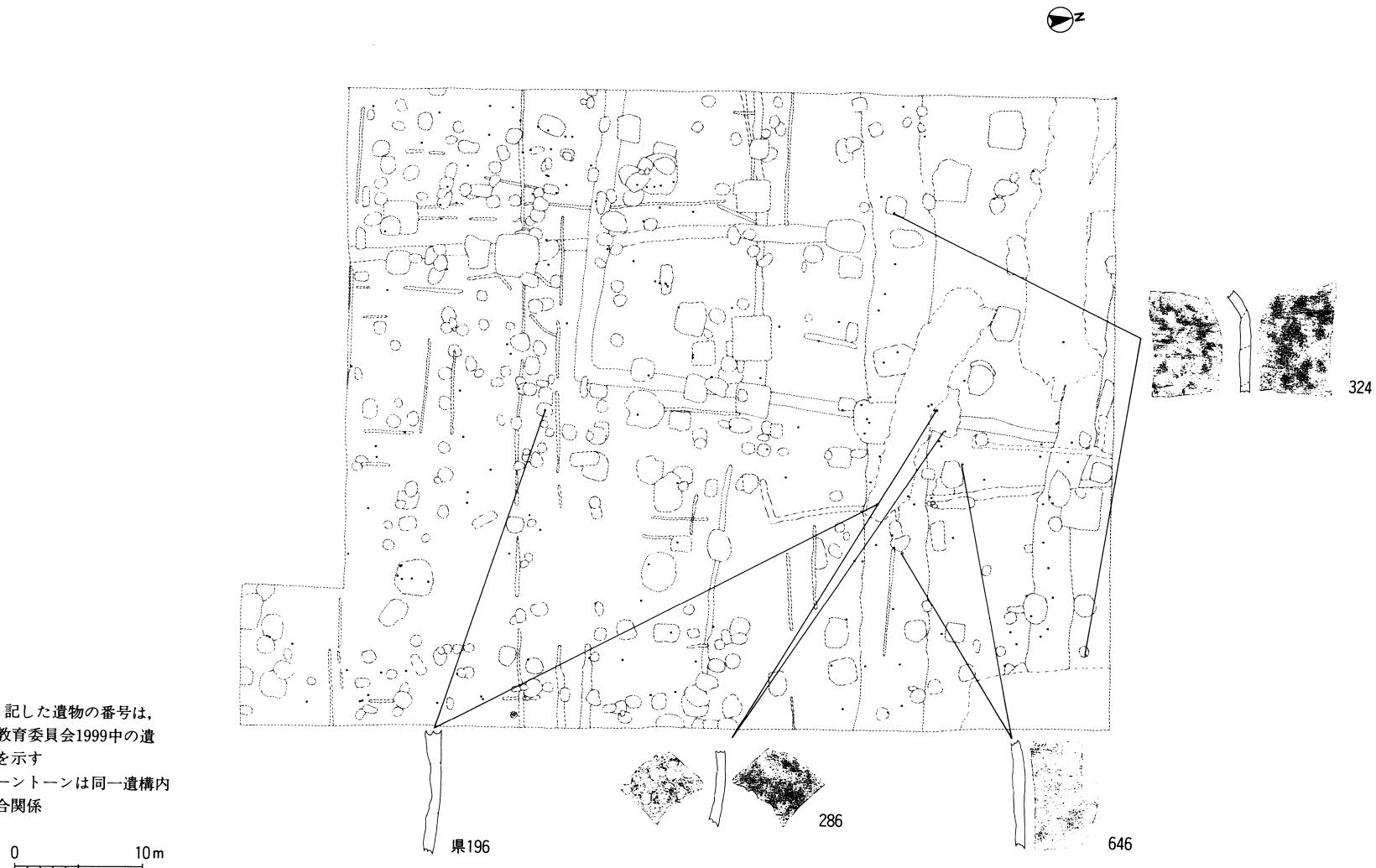
第30図 珠洲すり鉢接合関係図

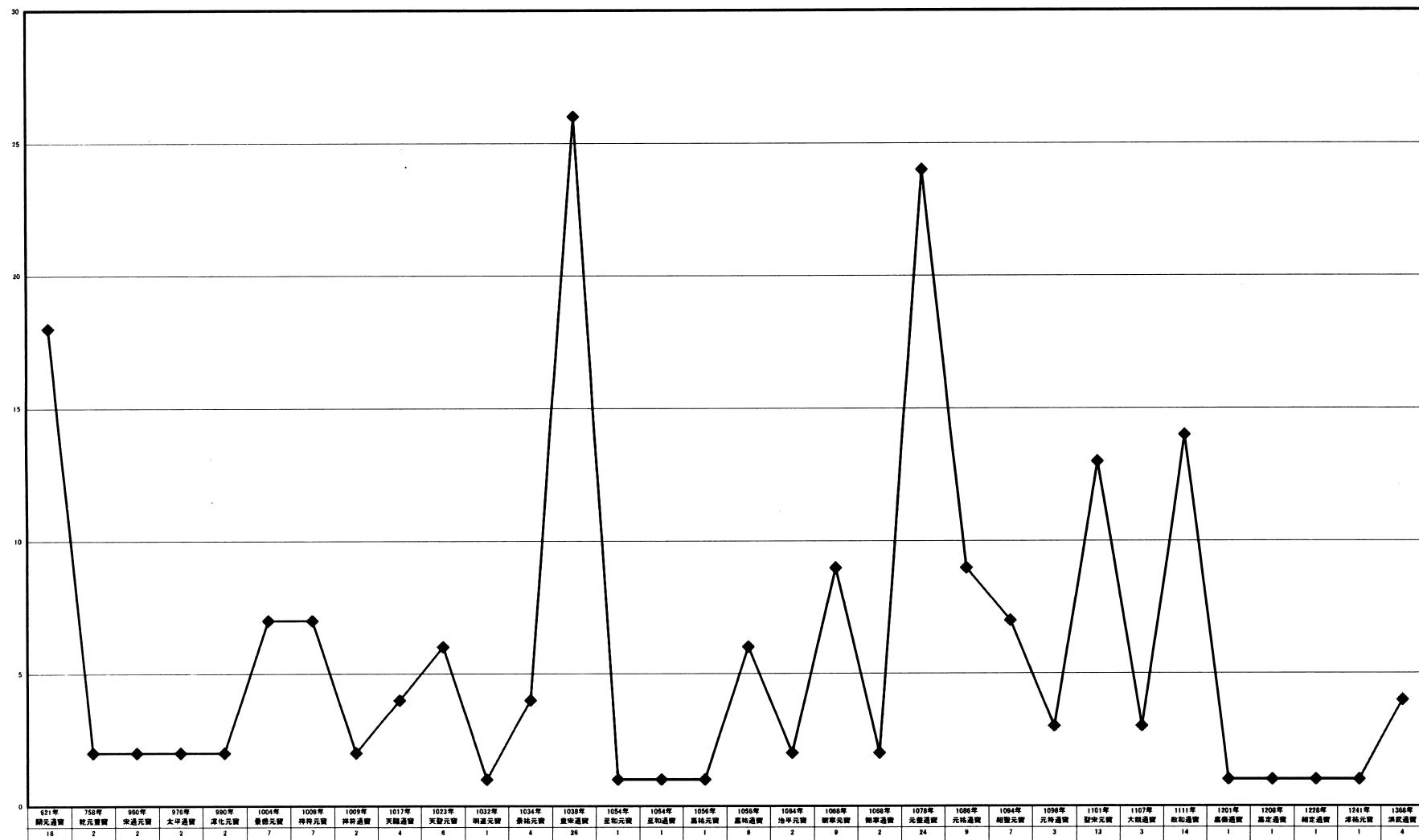
「県」と記した遺物の番号は、青森県教育委員会1999
中の遺物番号を示す
スクリーントーンは同一遺構内での接合関係



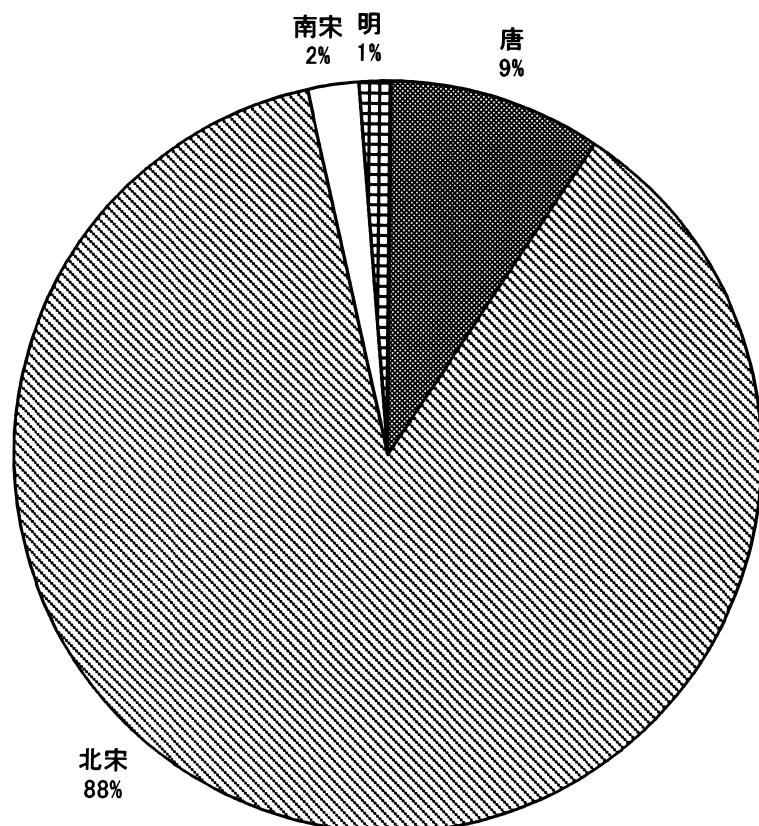
第31図 珠洲壺・甕接合関係図

第32図 瓷器系陶器・信楽接合関係図

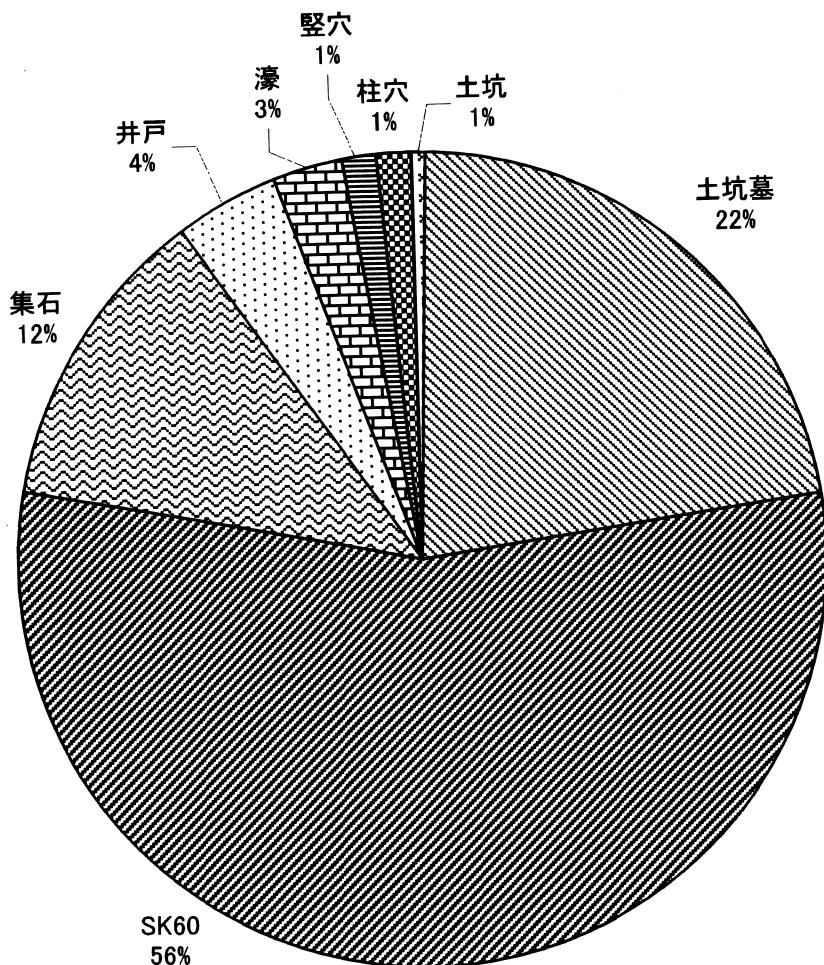




第33図 第86・87次調査出土錢貨構成



第34図 第86・87次調査出土銭貨鋳造国



第35図 銭貨出土遺構の性格

ある。遺跡調査における出土銭貨の多くはこのようなものであり、発掘によって得られたこれらの銭貨を活用することが本稿の課題である。今年度の成果を加えつつ、中世港湾遺跡として流通のネットワークで重要な役割を果たした十三湊遺跡を中心に銭貨の様相を述べていきたい。

(b) 98年度調査出土銭貨の分類

本年度の調査では、包含層から135枚、遺構内から144枚、計279枚の銭貨が出土した。本来は銭貨が本銭であるか模鋳銭であるか、あるいは今回判読不能として扱ったものに含まれるであろう無文銭の問題を明らかにして考えるべきではあるが、ここでは銭文上の分類（永井1999）のみにとどめてその構成を提示する（第33図）。

判読可能なものは32種類186枚であった。銭貨名別に分類すると、最も多いのは皇宋通寶（1038年括弧内は初鋳年以下同様）の26枚である。ついで、元豊通寶（1078年）24枚、開元通寶（621年）18枚、聖宋通寶（1102年）13枚、政和通寶（1111年）14枚、熙寧元寶（1068年）10枚と続く。

最古銭は開元通寶、最新銭は洪武通寶（1368年）である。鑄造国は、唐、北宋、南宋、明があるが、中でも北宋銭が最も多い。北宋銭162枚（84%）、唐銭20枚（11%）、南宋銭4枚（2%）、明銭4枚（2%）の順である（第34図）。

遺構の性格別にみてみると、土坑114枚（79%）、集石18枚（12%）、井戸6枚（4%）、濠4枚（3%）、竪穴2枚（1%）、柱穴2枚（1%）となる（第35図）。土坑のなかでSK60の縉銭（さし銭）83枚（56%）をのぞくと、他の土坑からの出土は33枚（23%）である。この中の32枚（22%）については、炭化物、骨片、鉄釘のうち1つ以上を共伴し土坑墓からの出土である。

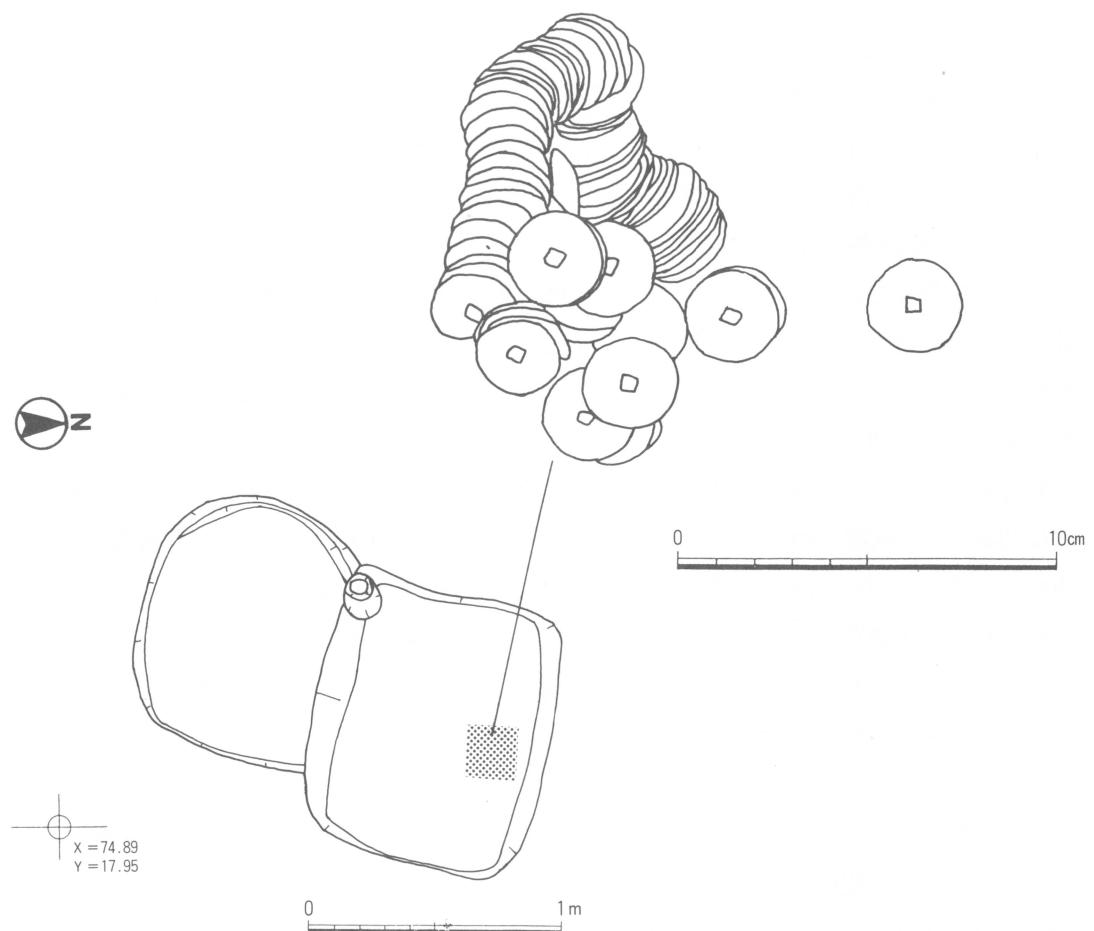
また特殊な例として、雨乞銭と呼ばれる銭文の四隅に穴をあけたものが1点出土している。

(c) SK60出土の縉銭について

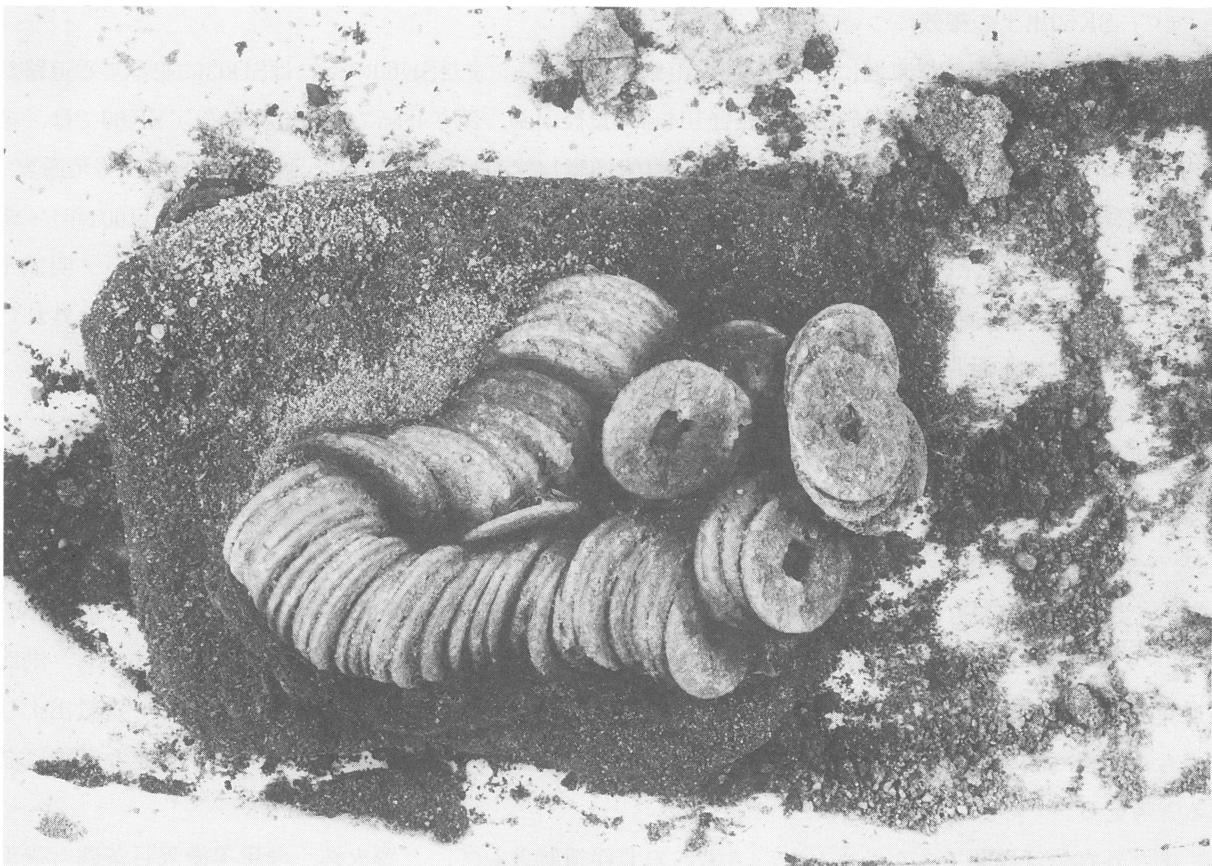
SK60は、十三湊遺跡を東西に走るSD02の南側に位置する。またSK60の南にはSD02に並行する道路が存在する。土坑は平面形が方形であり長径104cm、短径94cm、深さ48cmである（第36図）。SK60では、縉銭が一縉出土している（第36・37図）。縉銭は、皇宋通寶14枚、元豊通寶10枚、聖宋通寶8枚、開元通寶・政和通寶各5枚、祥符通寶（1008年）・熙寧元寶・元祐通寶（1086年）各4枚、景德元寶（1004年）・紹聖元寶（1094年）・元符通寶（1098年）各3枚、天聖元寶（1013年）2枚、天禧通寶（1017年）・明道元寶（1032年）・嘉祐通寶（1056年）・熙寧通寶（1068年）各1枚、判読不能13枚からなり、縉から外れたものと考えられる元豊通寶1枚と合わせて計83枚となる（第38図）。

この縉銭の年代観を推定するため、鈴木公雄の一括出土銭の時期区分を参考として考えていきたい。最古銭は621年の開元通寶、最新銭は1111年の政和通寶である。開元通寶以外が北宋銭であり、64枚（78%）をしめる。出土銭貨の初鋳年が上限年代を示すと考えれば、1期の年代決定銭種である皇宋元寶（1253年）・景定元寶（1260年）・咸淳元寶（1266年）以前を初鋳年とする銭貨ばかりである。だが83枚の出土のみでこれを1期のものとするには確証がもてない。しかし、3期の年代決定銭種である至正通寶（1351年）・天定通寶（1360年）・大中通寶（1361年）・大義通寶（1361年）・洪武通寶（1368年）のうち、洪武通寶については日本国内にある程度の量が入っており、少ない枚数の一括出土銭のなかに一定量出土しても不思議ではない。従って、洪武通寶が縉銭の中にはないという事実は年代観の一つの大きな基準になると考へる。

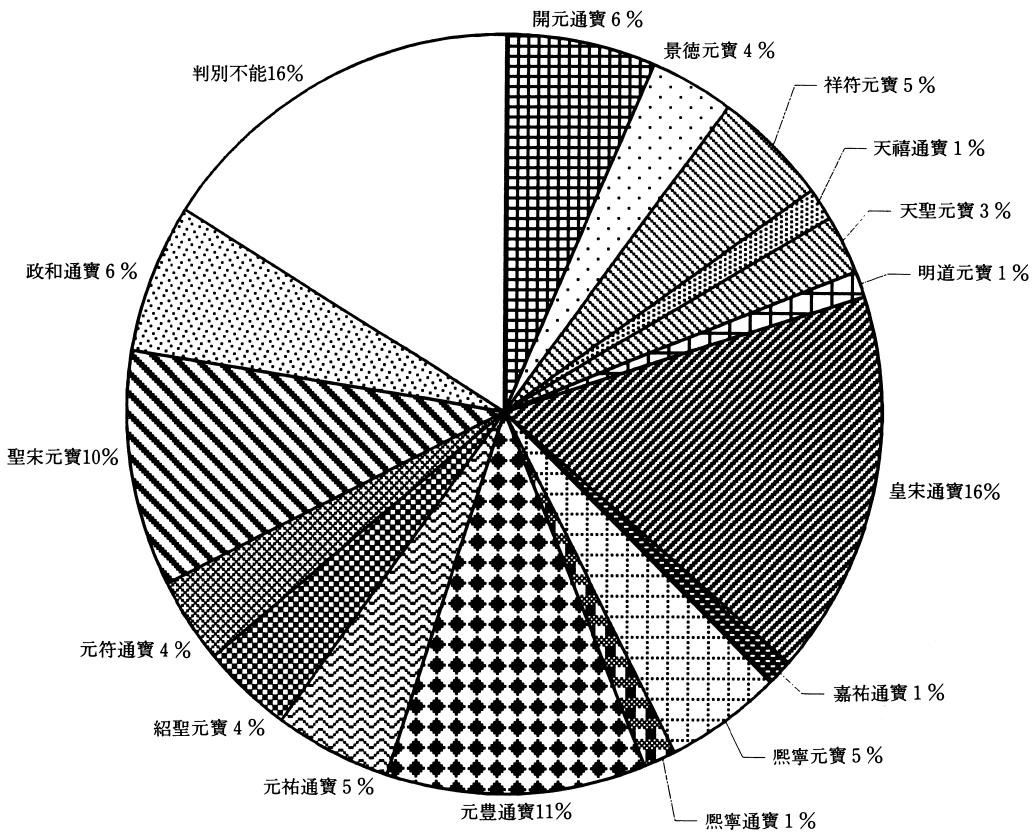
また外容器は確認できなかったが、遺構内の共伴遺物として、瓦器火鉢、瀬戸美濃天目茶碗（後I



第36図 SK60縉銭出土状況図（縮尺1/20, 錢の縮尺1/2）



第37図 SK60出土縉銭



第38図 緡銭銭種構成

期), 珠洲甕(V期)が出土した。瀬戸美濃天目茶碗は14世紀末~15世紀初頭, 珠洲は14世紀末~15世紀中葉の年代観が与えられる。また瓦器は東北地方に見られはじめるのは15世紀代になってからという見解がある(近江1997)。よってこの緋銭は、鈴木の3期以前のものであり、SK60の年代は、15世紀初頭と考えるのがもっとも整合性が高いと考える。

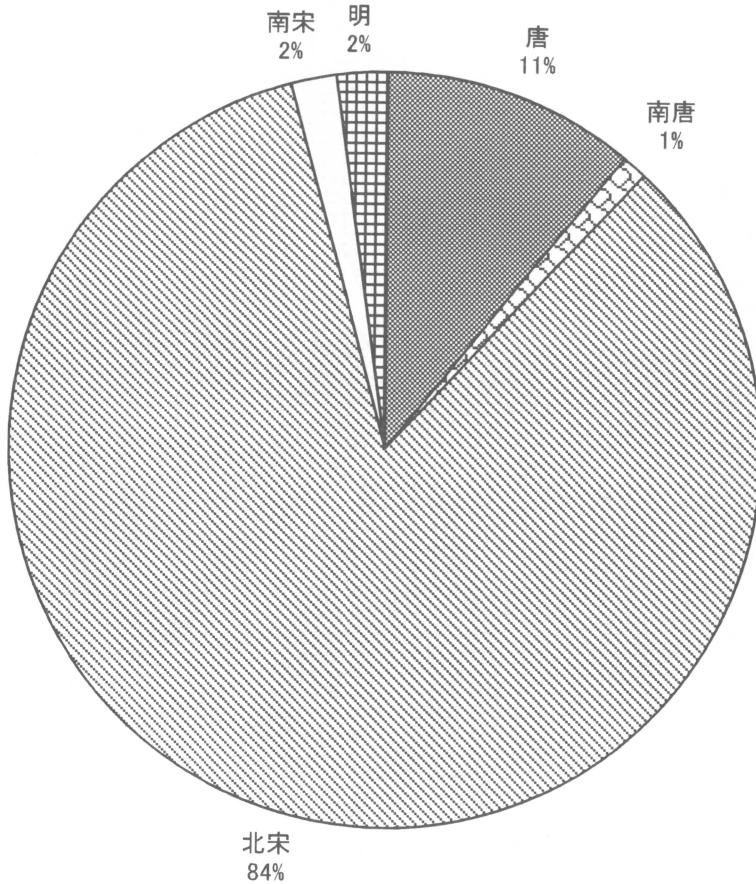
この土坑の性格について考えると、堀、溝付近からの出土という点では、内山俊身が述べているように、『一遍上人聖絵』卷五第四段の常陸の国で溝の中から銭を掘り出している場面に類似する(内山1998)。工藤清泰によれば青森県浪岡城においても境界を示す堀からの出土例がある(工藤1995)。このSK60の銭も呪的な埋納銭としての性格を考えることが出来る。またSK60は推定安藤氏館と濠の南側、家臣団屋敷と東西に走る道の北側に位置し、呪的な埋納銭をもつ境界としての評価を与えたい。

SD02は遺跡全体からみると、安藤氏館と家臣団屋敷地区の境界である。その境界が廃絶することは、他の境界を維持する機能を持つものが必要となり、SK60に銭を埋納した可能性が高い。SK60は、15世紀初頭の安藤氏館およびそこを中心とする境界の維持を果たすためのものであったと考える。

(d) 十三湊遺跡の出土銭貨

93年度の歴博の調査以降、合計で562枚が出土している(市浦村教育委員会・富山大学考古学研究室1997)。今回の調査で資料的に倍増したことになる。最古銭は開元通寶であり、最新銭は中世に限ると永樂通寶(1408年)である。今回の調査で、十三湊遺跡での未発見銭種を確認した。新たな銭貨は、宋通元寶(960年)、淳化元寶(990年)、明道元寶(1032年)、至和通寶(1054年)、熙寧通寶(1068年)、大觀通寶(1107年)、嘉定通寶(1208年)、紹定通寶(1228年)、淳祐元寶(1241年)の9種である。

鋳造国は、唐銭35枚(9%)、北宋銭351枚(88%)、南宋銭9枚(2%)、明銭5枚(1%)となる(第



第39図 十三湊遺跡出土銭貨鋳造国

39図)。銭種では、皇宋通寶の60枚が最も多く、元豊通寶57枚、開元通寶32枚、元祐通寶28枚、熙寧元寶23枚、聖宋通寶22枚、政和通寶20枚が中世銭貨400枚のうち各々5%以上を占める。これらはすべて北宋銭であり、洪武通寶、永樂通寶の割合はこれらに比べ低い。上述のような傾向に対して、鳴谷和彦は「出土銭貨の最新銭が、その遺構・遺跡の上限年代を示すと考えれば、15世紀第一四半期という十三湊遺跡の衰退の一端が窺える」(鳴谷1997)という見解を示している。

(e) 東北地方及び日本海側中世遺跡との比較

東北地方及び日本海側の中世遺跡における出土銭貨の様相から十三湊遺跡を検討する。遺跡によって出土枚数に開きがあるので判別可能な中世銭貨の割合から比較していく(第40・41図)。

青森県境関館遺跡(青森県教育委員会1986)は、珠洲、瀬戸美濃、青磁、白磁などの年代観により、13世紀前半から16世紀代の活動が窺える。最盛期は14世紀後半から15世紀前半であり、十三湊と同じく安藤氏に関連する遺跡と推定される。銭貨は、合計683枚が出土し、うち618枚が判読できる。最古銭は開元通寶、最新銭は寛永通寶である。最多の銭貨は、熙寧元寶、元豊通寶とともに76枚出土している。以下、元祐通寶61枚、開元通寶49枚、皇宋通寶48枚と続く。

青森県根城跡(八戸市教育委員会1993)は、珠洲、瀬戸美濃、青磁、肥前磁器など中近世の陶磁器が出土している。年代は、12世紀から20世紀が与えられている。南部氏は、建武元年(1334)から寛永4年(1627)までここに居を構えた。合計1195枚の銭貨が出土し、判別可能な銭貨は、634枚である。最古銭は開元通寶、最新銭は宣徳通寶(1433年)である。最も出土枚数が多いのは、永樂通寶で139枚に

のぼる。ついで洪武通寶114枚、元豊通寶53枚、皇宋通寶44枚、開元通寶39枚と続く。

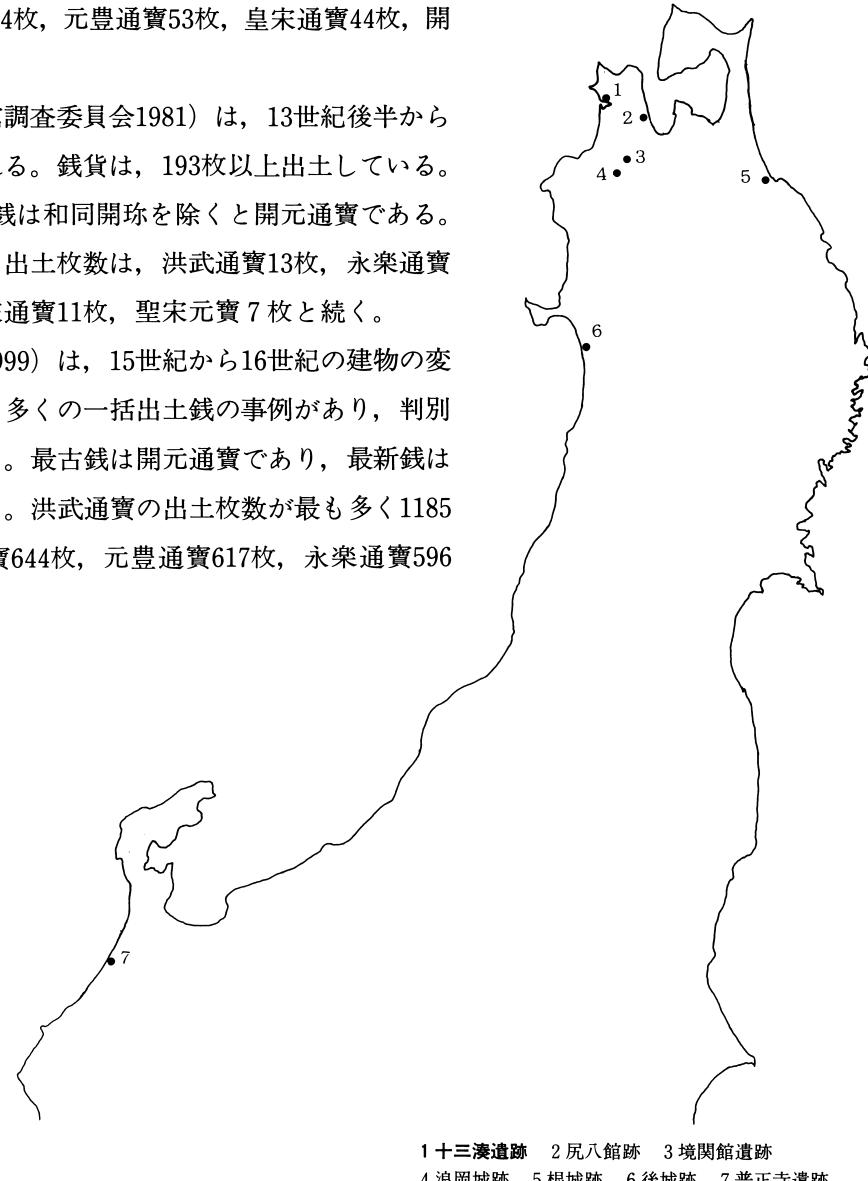
青森県尻八館跡（尻八館調査委員会1981）は、13世紀後半から16世紀の年代観が与えられる。銭貨は、193枚以上出土している。判別可能な119枚中、最古銭は和同開珎を除くと開元通寶である。最新銭は永樂通寶である。出土枚数は、洪武通寶13枚、永樂通寶12枚、元豊通寶11枚、皇宋通寶11枚、聖宋元寶7枚と続く。

青森県浪岡城跡（平山1999）は、15世紀から16世紀の建物の変遷が明らかにされている。多くの一括出土銭の事例があり、判別可能なものは7420枚である。最古銭は開元通寶であり、最新銭は洪徳通寶（1470年）である。洪武通寶の出土枚数が最も多く1185枚である。以下、皇宋通寶644枚、元豊通寶617枚、永樂通寶596枚、元祐通寶482枚と続く。

秋田県後城跡（秋田地

所・秋田県教育委員会

1978）は、珠洲系陶器、瀬戸美濃、青磁、白磁、染付などの年代観によつて13世紀から16世紀中葉にかけての遺跡と考えられている。そして、15世紀代から16世紀代がその最盛期であった。津軽十三湊から分離した安藤氏の初期の居城とする説もある。最古銭は開元通寶

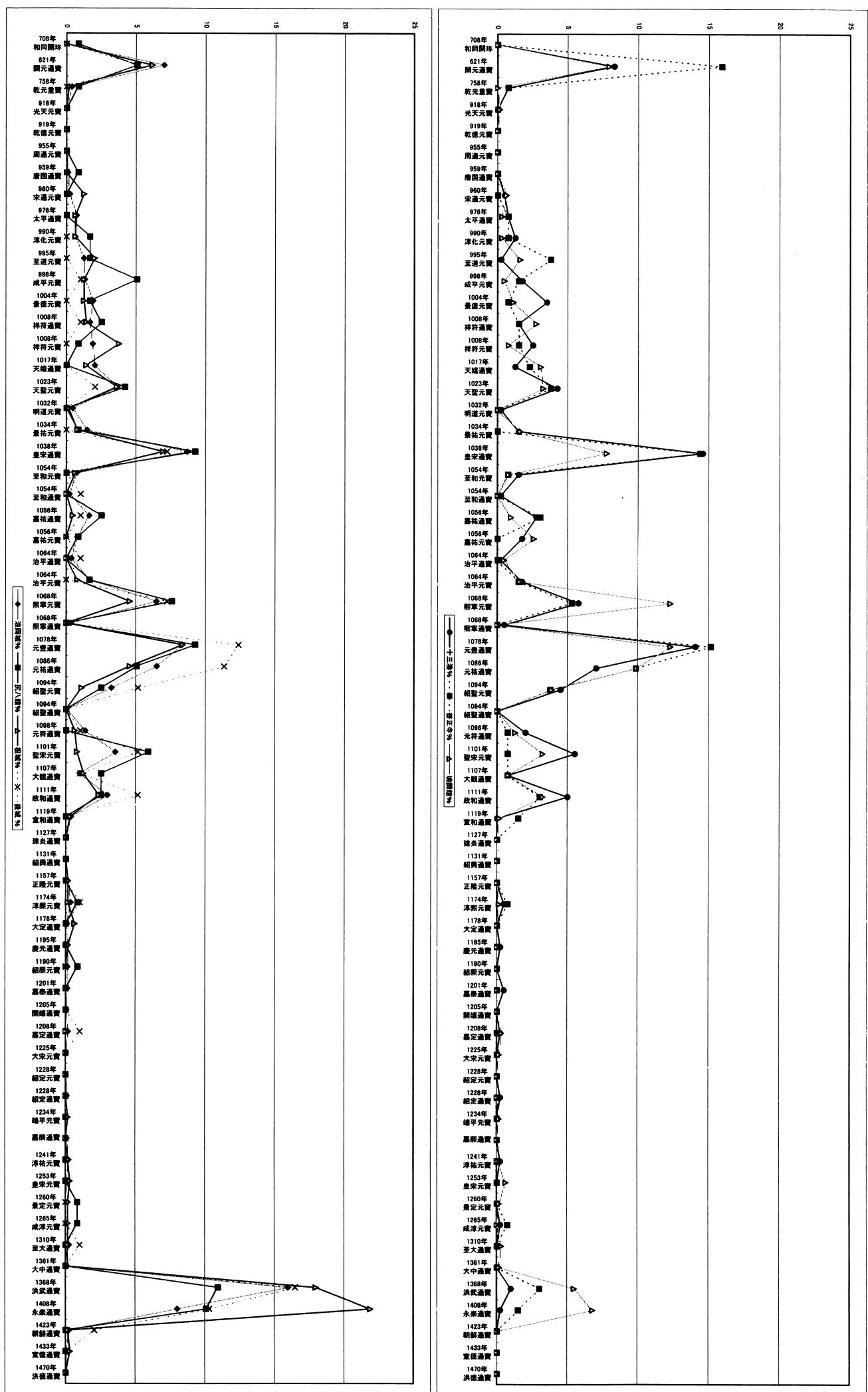


第40図 対象遺跡位置図

であり、寛永通寶2枚を除くと最新銭は朝鮮通寶（1423年）である。洪武通寶が最も多く16枚出土している。元豊通寶12枚、元祐通寶11枚、永樂通寶10枚、治平通寶7枚と続く。

石川県普正寺遺跡（石川県埋蔵文化財センター1984）は、14世紀に集落としての活動が始まり、15世紀初めに最盛期を迎えていたが、15世紀中頃には砂丘のため廃絶をむかえている。犀川河口に位置し、北加賀地方の中核港湾集落と考えられている。162枚の出土銭貨のうち、132枚が判別可能であった。最古銭は開元通寶、最新銭は永樂通寶である。最多の出土銭貨は、開元通寶21枚であり以下元豊通寶20枚、皇宋通寶19枚、元祐通寶13枚、熙寧元寶7枚と続く。

これらの遺跡を比較した結果、出土銭貨のピークは、皇宋通寶から政和通寶に至る部分および、明初期の洪武通寶、永樂通寶の部分に認めることが出来る（第39図）。前者は、各遺跡とも似たような動きを示しており、これらの遺跡が最盛期を迎えていた、13世紀から14世紀の日本海側における銭貨流通の様相を示すと考える。後者の明代の洪武通寶、永樂通寶の部分は、十三湊遺跡、境関館遺跡、普正寺遺跡



と後城遺跡、尻八館、根城の2つのグループに分かれる。十三湊、境関館、普正寺は、三者の洪武通寶、永樂通寶の平均が約3.2%であるのに対して、浪岡城、後城、尻八館、根城は約18%にもなる。

これは、15世紀中葉前後に衰退、廃絶を迎えた遺跡と、15世紀中葉以降も一定の営みが継続された遺跡を示すと考える。

(f) おわりに

以上のように、遺跡の出土銭貨は、必ずしも一括の出土ではない。だが資料的には、遺跡の盛衰を推定する点において一括出土銭と同じく有効である。一括出土銭ほど時期を限定できないという欠点は持っているが、人の手から離れてしまい、動きの止まった出土銭よりも銭貨のもつ経済流通の側面を鮮明に捉えることができる。本稿では、出土銭貨の比率を示しパターン化し分析を加えた。特に十三湊のような流通拠点と推定される遺跡では、出土銭貨の比率が遺跡あるいは遺跡内の場の盛衰を示すことが出来ると考える。またSK60の縉銭の意味は十三湊遺跡の南限から出土した23,442枚の一括出土銭との関係も考えられるのではないだろうか。今後の課題としては、SK60の縉銭の性格を十三湊遺跡の南限から出土した23,442枚の一括出土銭との関係からも考える必要がある。^{註2} また遺跡内あるいは遺跡単位の比較から性格、盛衰、更にそれらの普遍性・地域性といった点も検討が可能であろう。(阿部 来)

(註1)ただし、この時期区分は、1000枚以上の一括埋蔵銭を対象としている。

(註2)十三湊遺跡南限付近から出土した一括埋蔵銭は、永樂通寶を最新銭とする鈴木の4期(15世紀第2四半期～第3四半期)、永井の4期(15世紀第1四半期～第2四半期)に該当する。この資料中の永樂通寶出現率は、7.7%である。他の鈴木4期の一括出土銭事例における平均が3.48%であるのに対して、青森県の事例はいずれも高い数値を示している。これが銭貨流通の違いによるものか、埋蔵銭種の選択を意味するものかは今後の課題である。十三湊遺跡の既往の調査区からの出土銭貨の様相とは異なっており、埋蔵年代のみならず遺跡内の空間構造等にも注意が必要であろう。

(4) 砥 石

(a) はじめに

十三湊遺跡は本州島と北海道・樺太などをつなぐ北方交易の港の役割を担っていたと考えられており、いわゆる「三津七湊」の一つに数えられる。その交易品については、陶磁器類の考察がよく知られるところである。しかしその他の材質の製品、例えば木・金属・石製品についての様相の把握にはまだ至っていないのが実情である。そうした研究の現状の中で草戸千軒町遺跡においては、福島政文によって、砥石がある程度特定の生産地から消費地へ搬入されているということが明らかにされており(福島1996)，陶磁器の様相と比較しても興味深い。そこで本稿では十三湊遺跡出土の砥石を分析し、従来の土器・陶磁器の研究とは別の角度で当遺跡の実態に迫ってみたい。

なお本稿で分析する資料は、第10・11次調査(青森県教育委員会1996)、第15・16・17次調査(同1997)、第18・76次調査(青森県市浦村教育委員会未刊行)、第74・75次調査(青森県教育委員会1998)、第86次調査(青森県市浦村教育委員会・富山大学考古学研究室、本調査区)、第87次調査(青森県教育委員会1999)の出土砥石である。

(b) 研究方法

砥石の分析方法としては、福島政文の論考を参考に、石材を基にした砥石の分類と、寸法・重量を基